

臨地実習における看護学生の 「他職種との連携」に関する学習の実態（第2報）

The student's Learning about Cooperation of the Nurse and Other Profession
in Clinical nursing Practice (the second Report)

長澤 利枝 馬場 志乃 前野真由美

Rie NAGASAWA Sino BABA Mayumi MAENO

I. はじめに

近年、医療の高度化や在院日数の短縮化に伴い、患者及び家族の抱える問題の解決のために、多くの専門職が協働して行うチーム医療の重要性がクローズアップされている。これに伴い、医療・福祉の現場において、“インタープロフェッショナルワーク”（以下IPWと略す）の必要性が指摘されるようになってきた。^{1) 2) 3)} 看護学教育の立場からIPW教育の実践について考えた場合、現状において一番効果的な方法は、やはり臨地実習における教育である。これは、本短期大学部看護学科においても「『他職種との連携』の重要性を学ぶ」として、各領域の実習目標の中に掲げられているが、実際に看護学生が臨地実習を通じてそれをどの程度学びとっているのか、具体的にどのような場面を通じて学びとっているのかについては、実態が十分に明らかにされていないのではないかと考えた。

そこで、平成13年度に本短期大学部看護学科3年生を対象とした調査研究⁴⁾を実施した。その結果、「他職種との連携に対する意識」についてはほぼ明らかになったが、「他職種との連携の重要性を学んだ実習経験」については、十分明らかにすることができなかった。

そのため、平成14年度に「学生達が臨地実習のどのような経験・場面を通じて、他職種との連携の必要性を実感したか」ということを中心に調査研究を行った。今回の論文は、その結果をまとめたものである。

II. 研究目的

本研究は、臨地実習における看護学生の「他職種との連携の重要性を学んだ実習経験」についての実態を明らかにすることにより、「他職種との連携」に対する効果的教育方法検討のための一資料とすることを目的とする。

なお、本研究においては、“他職種”を「医療関連専門職（医師，MSW，栄養士，薬剤師，PT・OT等のリハビリ職，事務職員等）」と定義した。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象

本短期大学部第一看護学科（看護師養成3年課程）3年生のうち、調査に同意が得られた計58名の学生。

2. 調査期間

平成13年12月

3. 調査方法

平成13年度第一看護学科3年生における、臨地実習「基礎看護実習」「成人看護実習Ⅰ」「成人看護実習Ⅱ」「成人看護実習Ⅲ」「小児看護実習」「母性看護実習」「老人看護実習」「訪問看護実習」「保健所・市町村実習」「精神看護実習」全てが終了する週の最終日に、質問紙調査を実施した。

4. 調査内容

質問紙において以下の項目を調査した。

- 1) 看護職と他職種との連携の必要性を感じた実習
- 2) 連携の必要性を感じた他職種（複数回答）
- 3) 看護職と他職種との連携の必要性を感じた場面
- 4) 看護職と他職種との連携の必要性を感じた経験・場面の内容（自由記述）

5. 分析方法

- 1) 調査内容1)～3)については、SPSS統計ソフトを用いた単純集計及びクロス集計により分析した。
- 2) 調査内容4)（自由記述）については、文脈の中で捉えた特性を抽出しそれらを比較検討して、共通性・類似性を分析・整理した。

IV. 結果

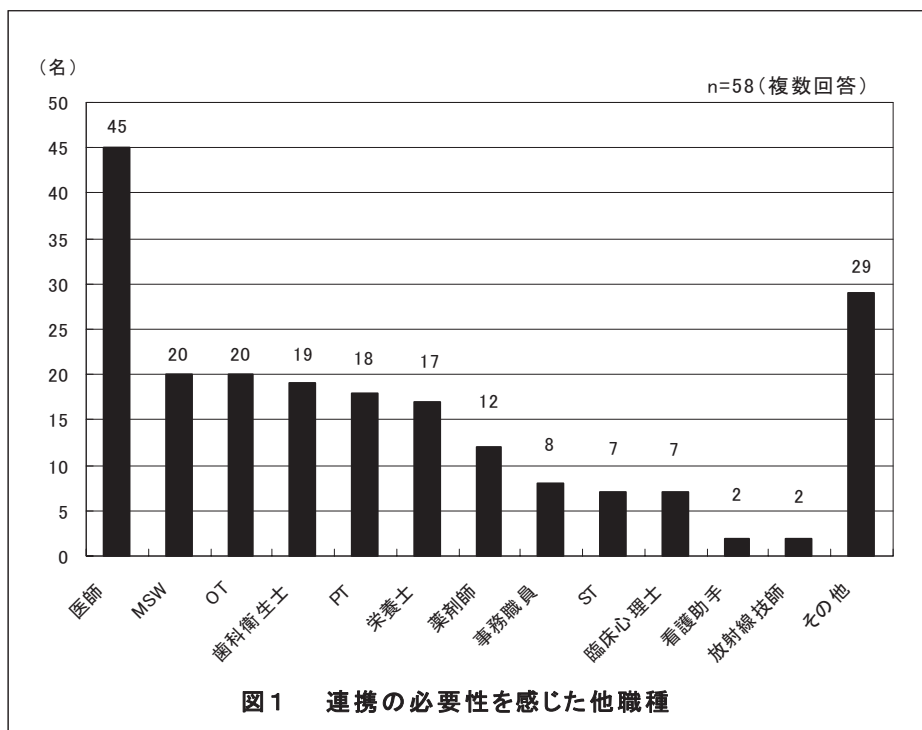
1. 看護職と他職種との連携の必要性を感じた実習

最も多かったのは「訪問看護実習」31名（53.4%）であり、以下「保健所・市町村実習」13名（22.4%）、「精神看護実習」5名（8.6%）、「成人看護実習Ⅲ」4名（6.9%）、「老人看護実習」2名（3.4%）、「小児看護実習」1名（1.7%）の順になっていた。

「基礎看護実習」「成人看護実習Ⅰ」「成人看護実習Ⅱ」「母性看護実習」の4つについては、取り上げた学生はいなかった。

2. 連携の必要性を感じた他職種 ※ 図1, 表1 参照

最も多かったのは「医師」45名であり、以下「その他」29名、「MSW（医療社会福祉士）」「OT」各20名、「歯科衛生士」19名、「PT」18名、「栄養士」17名、「薬剤師」12名、「事務職員」8名、「ST（言語療法士）」「臨床心理士」各7名、「看護助手」「放射線技師」各2名の順になっていた。



「その他」に記入されていた職種は、「ケアマネージャー」16名、「ホームヘルパー」11名、「介護福祉士」10名、「MSW」4名、「保育士」「訪問入浴業者」2名、「HOT（在宅酸素療法）業者」「福祉器具業者」「PSW（精神保健福祉士）」「運動指導員」各1名であった。

また、連携の必要性を感じた“実習”と連携の必要性を感じた「他職種」との間で有意差が認められたものは、“訪問看護実習”と「医師」「PT」「その他」、 “保健所・市町村実習”と「栄養士」であった。

表1 実習別・連携の必要性を感じた他職種

※ 複数回答, * p < 0.05

実習の種類	医師	PT	OT	栄養士	MSW	歯科衛生士	薬剤師	ST	事務職員	看護助手	臨床心理士	放射線技師	その他
訪問看護実習	29*	15*	12	8	14	10	7	4	7	2	3	1	19*
老人看護実習	1	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
成人看護実習	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
保健所・市町村実習	9	1	1	9*	2	9	2	3	1	0	4	0	5
成人看護実習Ⅱ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
小児看護実習	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
精神看護実習	2	1	3	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1
成人看護実習Ⅲ	3	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	1	1
母性看護実習	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基礎看護実習	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	44	18	18	17	19	19	11	7	8	2	7	2	27

3. 看護職と他職種との連携の必要性を感じた場面 ※表2・3参照

最も多かったのは「看護職の言動を見て」34名（58.6%）であり、以下「患者・家族から話を聞いて」6名（10.3%）、「他職種から話を聞いて」「その他」各5名（8.6%）、「他職種の言動を見て」4名（6.9%）の順になっていた。

そして、連携の必要性を感じた“場面”と連携の必要性を感じた「他職種」との間で有意差が認められたものは、“看護職の言動を見て”と「医師」「その他」であった。また、連携の必要性を感じた“場面”と連携の必要性を感じた「実習」との間で有意差が認められたものは、“看護職の言動を見て”と「訪問看護実習」であった。

表2 場面別・連携の必要性を感じた他職種 ※ 複数回答, * p < 0.05

場 面	医師	PT	OT	栄養士	MSW	歯科衛生士	薬剤師	ST	事務職員	看護助手	臨床心理士	放射線技師	その他
看護師の言動を見て	31*	11	11	11	14	12	8	6	6	2	4	1	18*
患者・家族から話を聞いて	5	3	2	2	2	2	1	0	1	0	2	0	3
他職種から話を聞いて	1	1	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2
他職種の言動を見て	2	0	0	3	0	3	1	0	0	0	1	1	1
そ の 他	4	2	3	1	1	1	1	1	0	0	0	0	2
合 計	43	17	18	17	18	18	12	7	7	2	7	2	26

表3 場面別・連携の必要性を感じた実習 ※ n = 54, * p < 0.05

場 面	基礎看護実習	成人看護実習 I	成人看護実習 II	成人看護実習 III	小児看護実習	母性看護実習	老人看護実習	訪問看護実習	保健所・市役所実習	精神看護実習	合計
看護師の言動を見て	0	0	0	0	1	0	0	23*	7	3	34
患者・家族から話を聞いて	0	0	0	2	0	0	0	4	0	0	6
他職種から話を聞いて	0	0	0	1	0	0	2	1	1	0	5
他職種の言動を見て	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	4
そ の 他	0	0	0	0	0	0	0	1	2	2	5
合 計	0	0	0	4	1	0	2	29	13	5	54

4. 看護職と他職種との連携の必要性を感じた経験・場面の内容

1) 連携の必要性を感じた場面状況 ※表4参照

場面状況についての記入内容は、全部で6項目に分類され、最も多かったのは、「看護職の話を聞いて または 行動を見て」21名(36.2%)であった。

表4 連携の必要性を感じた場面状況

n=58

連携の必要性を感じた場面状況の分類		回答数 (%)
A	看護職の話を聞いて または 行動を見て	21 (36.2)
B	患者・家族の様子を見て または 話を聞いて	7 (12.1)
C	看護職と他職種の連携の実態を見て	6 (10.3)
D	患者に対する多職種による援助の様子を見て	6 (10.3)
E	多職種による治療・ケアに関する方針・計画等についての検討の様子を見て	2 (3.4)
F	患者に対する専門職による説明・指導の様子を見て	2 (3.4)
無回答		14 (24.1)

2) 連携の必要理由及び連携内容 ※表5参照

連携の必要理由及び連携内容についての記入内容は、全部で14項目に分類され、最も多かったのは、「情報交換・情報の共有化が必要」13名(22.4%)であった。

表5 連携の必要理由&連携内容

n=58

連携の必要性を感じた場面状況の分類		回答数 (%)
a	情報交換・情報の共有化が必要 ☆	13 (22.4)
b	社会復帰や地域での生活へ向けた、多職種による協力体制作りが必要 ☆	5 (8.6)
c	地域の利用者個々のニーズに応じた、多職種によるサービス提供が必要	5 (8.6)
d	専門職による指導が効果的 ☆	3 (5.2)
e	一職種による援助での不足部分を、多職種連携の援助によって補っていくことが必要	3 (5.2)
f	一つの援助にも、多角的視点からの判断が必要	2 (3.4)
g	専門職からの説明が必要 ☆	2 (3.4)
h	看護職による患者・家族—他職種間の調整が必要 ☆	2 (3.4)
i	各種社会資源の活用が必要	2 (3.4)
j	患者に関する情報の正確・迅速な伝達が必要 ☆	1 (1.7)
k	他職種による援助だけでなく、看護職が連携して援助するとより効果的	1 (1.7)
l	専門職としての役割分担が必要 ☆	1 (1.7)
m	病院—地域社会との連携が必要 ☆	1 (1.7)
n	ボランティアの導入が必要 ☆	1 (1.7)
無回答		16 (27.6)

V. 考察

1. 看護職と他職種との連携の必要性を感じた実習

調査結果を全体的に捉えた場合、「訪問看護実習」を取り上げた学生が特に多い。在宅療養の現場において、患者・家族のQOLを尊重しつつ継続的な援助を提供していくためには、各種社会資源を活用しながら、看護師以外にも医師、介護職、リハビリ職等の多職種が密に関わる必要がある。実習中において、実際にその様子を学生達が直接見聞きする機会も多いため、連携の必要性をより強く実感することができたということが考えられる。

2. 連携の必要性を感じた他職種 ※ 図1, 表1 参照

「医師」が第1位となった要因は、平成13年度の調査結果と同様に、実習施設（病院、老人保健施設等）における実習を通じて、学生達が最も接する機会が多く、ナースステーション等にて看護職との関わりが多く見られる他職種であることが考えられる。また、訪問看護実習と「医師」との間で有意差が見られたことから、訪問看護実習を通じて、在宅療養における医師－看護職間の連携の重要性を、多くの学生達が学びとったことが推察できる。

また、平成13年度の調査結果と同様に、「OT」「PT」「栄養士」の順位が高いのは成人看護実習Ⅰ、成人看護実習Ⅱ、成人看護実習Ⅲ、老人看護実習等で、多くの学生が担当患者のリハビリテーション場面に接したり、栄養士による栄養指導の見学を行っていたことが要因となったと考えられる。その一方で、同様に「放射線技師」の順位が低かったのは、実習を通じて学生達が検査部門の他職種と直接接する機会や、看護職と検査部門の他職種との関わり場面に接する機会がかなり少なかったことが、要因となったと考えられる。

一方、「MSW」「歯科衛生士」の順位が高かったのは、訪問看護実習や保健所・市町村実習を通じて、患者の施設－在宅間のスムーズな移行のためにMSWの役割が重要であることや、在宅療養や集団検診等における歯科衛生士の各種指導が必要であることを、多くの学生達が実感したためではないかと考える。

さらに、訪問看護実習の場面において、「その他」の職種との連携の必要性を感じたと記入した学生が多かったのは、学生達が施設内から地域へとケア実践現場の広がりを理解していくことで、医療に関連した様々な職種の存在に改めて気付いたためではないかと考える。

3. 看護職と他職種との連携の必要性を感じた場面 ※表2・3 参照

「看護職の言動を見て」の場面が第1位となった要因としては、学生達が看護実習として臨地実習に臨んでいることが前提にあり、看護の実践者としての看護職の各種言動に、常に注目しているためではないかということが考えられる。「看護職の言動を見て」の場面と訪問看護実習との間で有意差が見られたことは、看護職の判断力・実践力等がより高く必要とされる訪問看護の場面において、多くの学生達が他職種との連携の必要性を実感していたことが考えられる。また、「看護職の言動を見て」の場面と医師との間で有意差が見られたことから、看護職が最も多く関わる機会が多いと考えられる医師とのやり取りの場面を通じて、多くの学生達が医師との連携の必要性を実感していたことが推察できる。

次に、「患者・家族から話を聞いて」の場面が第2位となっている要因としては、学生達が実習の中で、担当患者やその家族と接する機会が多いため、患者・家族の医療職者側への要望

等を聞く機会があり、それを通じて患者・家族側に立って現状を考えながら、他職種との連携の必要性を実感する経験を得ていることが考えられる。

また、「他職種から話を聞いて」や「他職種の言動を見て」の場面を選択した学生が少なかったことから、学生達が実習中に他職種と直接関わったり、他職種の言動を見る機会が看護職に比べて少ないことや、学生自身がそれらに着目する度合いが低い傾向にあることが窺われた。

これらのことから、学生達が他職種に対して連携の必要性を感じるのは、臨地実習の中で、その他職種と直接的にどれだけ関わる機会があったか、または、その他職種と看護職の関わりの様子をどれだけ見る機会があったかということと、大きく関連していることが窺われた。

4. 看護職と他職種との連携の必要性を感じた経験・場面の内容

1) 連携の必要性を感じた場面状況 ※表4参照

「A.看護職の話聞いて または 行動を見て」が最も多かった理由としては、他職種との連携の必要性を感じた場面における「看護職の言動を見て」の場面が、第一位となった理由と同様のことが考えられる。

全体的傾向として、看護職や他職種が実際に援助・検討等をしている場面を見たという直接的経験や、看護職から現場での実体験に関する話を聞いてという場面状況を示していた学生達が多かった。このことから、学生達がこれらのことを経験する機会を得たことが、他職種との連携の必要性を実感する学習機会につながったということが考えられる。

2) 連携の必要理由及び連携内容 ※表5参照

今回の調査結果において分類された14項目中9項目は、平成13年度の調査結果に示されていたものとはほぼ同様の内容(表5中に☆印で提示)であった。中でも、今回の調査結果で最も多かった「a. 情報交換・情報の共有化が必要」は、平成13年度の調査結果においても、特に多く見られたことが示されている。aの重要性を挙げた学生達が多かったのは、施設内(病院, 老人保健施設, 公的機関等)及び施設外(訪問看護等)における全ての実習を通じて、各種場面・状況の中で、この項目に関する重要性を実感する機会が最も多いためではないかということが考えられる。

一方、14項目中の残り5項目は、一職種のみでなく多職種で援助してくことの重要性や効果について述べられているものが多く、学生達の"チーム医療"に対する意識の高まりが窺われる。

安酸^{5) 6) 7)}は、経験型実習教育を展開していくために教師に求められる能力の中に、状況判断能力を挙げ、その必要性を述べている。臨地実習における様々な状況・場面の中で、個々の学習目的に合致した、最も効果的な時、場所、方法を選択し実践していくことは、確かに個々の教師の状況判断能力に大きく左右されている。最も効果的な機会・タイミングを捉え、すかさず学習機会の提供へと結びつけていくことができれば、大きな学習成果が得られ、逆に、その最適な機会・タイミングを逃せば、十分な学習成果が得られないことにつながることは、容易に予測される。その際、この最適な機会・タイミングをいかにキャッチできるかが、個々の教師の状況判断能力にかかっているのだと考える。

「他職種との連携」学習においても、教師の状況判断能力は重要なポイントとなっている。今回の調査結果では、学生達が臨地実習の中で、どれだけ直接的に他職種と関わる機会があったか、看護職と他職種との関わりの様子をどれだけ見る機会があったかということが、「他職種との連携」の必要性・重要性の実感につながったことが窺われた。平成13年度の調査結果でも、意図的に他職種と接する機会を設ける等の実習方法上の工夫が、学生達の「他職種との連携」の必要性・重要性の理解につながったことが示唆されている。

実習場所は様々であっても、それぞれの現場において、看護職と他職種との様々な関わりは存在している。最近の医療・福祉の動向からも、一職種だけでは対応できない問題は増大し、その何らかの影響が各現場において現れてきている。このような現場において、「他職種との連携」学習のための最適な機会・タイミングをキャッチし、学習機会の提供へと結びつけていくことができるかどうかは、実習担当教員各々の意識や実践にかかっていると言っても過言ではない。しかし、その一方で、実習担当教員各々の活動だけでは限界もあり、より効果的学習へ向けて、実習の目的・方法を含めた全体的構成等についても検討していく必要があるのではないかと考える。

VI. おわりに

今回の研究により、看護学生達が他職種に対して連携の必要性を実感するのは、臨地実習の中で、他職種と直接的にどれだけ関わる機会があったか、または、他職種と看護職の関わりの様子をどれだけ見る機会があったかということと大きく関連していることが示唆された。

また、これに関しては、平成13年度の調査結果においても示唆された、学生達が経験する実習内容・方法（他職種による講義を設定したり、多職種による合同カンファレンスへの参加を促す等、意図的に他職種と接する機会を提供しているかどうか）からの影響も大きいことが窺われる。

多職種による“チーム医療”の必要性は、今後様々な現場において、ますます高まっていくことが予測される。同時に、“チーム医療”が円滑に行われていくためには、様々な問題・課題が存在していることも指摘されている。^{8) 9) 10)} このような状況の中で、時代の要請に応える医療福祉職者の育成を目指した、IPW教育の必要性はますます高まっていくことが予測され、今後も引き続き、IPW教育のための効果的教育方法検討に関する研究の意義は大きいと考える。

また、平成13年度の研究及び今回の研究において、「他職種との連携」学習のために、学生達にとって具体的にどのような教育方法が効果的だったかに関しては調査されていないため、今後の課題としていきたい。

VII. 引用・参考文献

1. 池川清子・田村由美・工藤佳子：今、世界が向かうインタープロフェッショナル・ワークとは；21世紀型ヘルスケアのための専門職種間連携への道。第1部：Inter-professionalとは何か；用語の定義および英国における発展経過，Quality Nursing, 4 (11), 75,

- 1998.
2. 池川清子・田村由美・工藤佳子：今，世界が向かうインタープロフェッショナル・ワークとは；21世紀型ヘルスケアのための専門職種間連携への道．第3部：世界の Inter-professional 教育と実践の動向；ヨーロッパにおける Inter-professional 教育の推進と課題．Quality Nursing, 5 (3), 53-58, 1999.
 3. 吉本照子：インタープロフェッショナル・ワークの現状と課題；インタープロフェッショナル・ワークによる専門職の役割遂行．Quality Nursing, 7 (9), 4-11, 2001. 27-33, 2001.
 4. 長澤利枝・伊東志乃・前野真由美・良知雅美・牧野典子：臨地実習における看護学生の「他職種との連携」に関する学習の実態（第1報）．静岡県立大学短期大学部研究紀要，第16号，99-108，2003.
 5. 安酸史子：経験型実習教育の考え方．Quality Nursing, 5 (8), 4-12, 1999.
 6. 安酸史子：経験型の実習教育の提案．看護教育, 38 (11), 902-913, 1997.
 7. 安酸史子：授業としての臨地実習～学生の経験を教材化する力をつけるために．看護管理, 6 (11), 790-793, 1996.
 8. 細田満和子：医療における患者と諸従事者への提言―「チーム医療」の社会学・序説―．ソシオロギス, No.24, 79-95, 1996.
 9. 細田満和子：病院における医療従事者の組織認識―「チーム医療」の理念と認識―．現代社会理論研究, No.10, 253-265, 2000.
 10. 細田満和子：「チーム医療」とは何か～それぞれの医療従事者の視点から．保健医療社会学論集, No.12, 88-101, 2001.
 11. 大津律子：インタープロフェッショナル・ワークの現状と課題；看護学教育におけるインタープロフェッショナル・ワーク教育．Quality Nursing, 7 (9), 12-17, 2001.
 12. 長澤利枝：患者の問題解決へ向けた他職種とのかかわりにおける看護職の発言及び行動の特性．看護管理, 11 (1), 47-52, 2001.

(2004年11月4日受理)